

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範疇のものとして捉えて下さい。

生涯 84 年一貫教育

～ 学習指導要領に足りないもの、キャリア教育が補うもの① ～

¶日本人の平均寿命って男性が 81 歳で、女性が 87 歳なんだそうです（残り何年ですか？（笑））。これが「平均」って!!!…で、性別をひっくりめると 84 年。日本に暮らす人は平均 84 年の人生を「一生感動。一生青春。」するんです（図 1）。でも、84 年という時間はとても長いので、乳幼児期(0~5 歳)、学童期(6~12 歳)、思春期(13~18 歳)、青年期(19~39 歳)、壮年期(40~64 歳)、高齢期(65 歳以上)といった「節目」を設定して、人生の段階を捉えたりしますよね。

¶さて、学校教育、特に特別支援学校においては一般的に「小学部（本校ではさらに「小低」・「小高」）」、「中学部」、「高等部」という「節目」に分けていますよね。実はこの「節目の設定」にメリットとデメリットがあるというところから副題の「学習指導要領に足りないもの、キャリア教育が補うもの」が見えてきます。¶まず、「節目」のメリットについてです。学部や学年の「節目」があることによって、ある程度のまとまりをもった「ライフステージ（生活年齢に応じた段階）」を意識することができます（図 2）。例えば「小高さんになったらチャイムで動けるようになろうね」とか、「中学部に行ったら腕時計をしようね」等々。

¶一方で、「節目」にはデメリットもあって、本来的には切れ目無く続いている子どもたちの生活を分断して、急な変容を強いてしまう側面もあります。例えば「小高になると厳しくなる」という保護者間のうわさや、「中 1 ギャップ」、高等部に入ると急に礼節を意識し始める…などが挙げられます。この「節目による分断」が学習指導要領の（学校教育の）一つ目の「弱点」です（図 3）。

¶また、第 3 の観点からになりますが、私たちの肌感覚として、教員間でも「小低の先生」と「小高の先生」、「中学部の先生」、「高等部の先生」には考え方の違いを感じることが少なくないですよね。もっといえば、学年団でも…。これは大人サイドですが、「学部」や「学年」という「節目による分断」のデメリットがそこもあります。

¶さて、この「学習指導要領の弱点」に当たる「節目による分断」を補うべくして、満を持して「キャリア教育」が登場します（図 5）。キャリア教育の長所は「節目」を越えて、教育内容の系統性（順序を追って積み上げていくこと）や一貫性（教育内容が迷走しないこと）を補う下位目標（前号参照）を出せるところです。キャリア教育を取り入れることで 12 年間（もっと言えば 84 年間）という長い時間軸を見渡して、「節目による分断」という学習指導要領の弱点を補うことができます。

¶最後に前号の内容も含めてまとめます。日々の授業は「学習指導要領」の内容のみで十分に回ります。「素うどん」だけで「そこそこ美味しい」のです。しかし「キャリア教育」というトッピングをすることで、「節目による分断」という「学習指導要領の弱点」が解消されます（図 4）。物足りなさが解消されて、「とっても美味しい」なるわけです。具体的には右の「キャリアスイッチ（前号参照）」を使うことで、節目を越えた視点（下位目標）が得られます。（図 5）



図 1 「節目」なく続していく 84 年

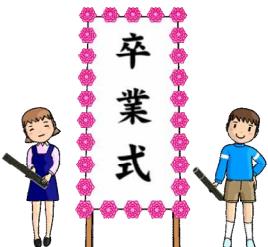


図 2 「節目」の意識にはメリットも沢山

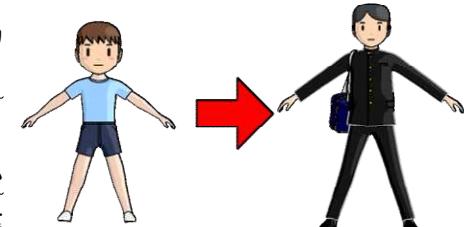


図 3 「節目」のデメリット。「分断」



図 4 キャリア教育は「トッピング」

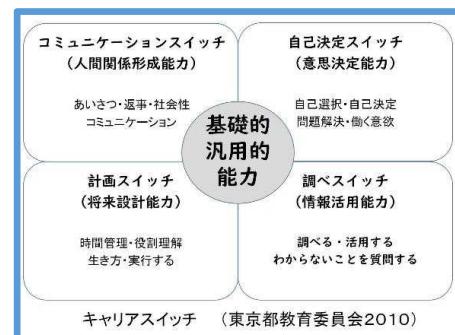


図 5 キャリアスイッチ（再掲載）